

学生海外調査研究	
保育唱歌および雅楽に関する楽書資料の収集および研究調査	
東元 りか	比較社会文化学専攻
期間	2009年11月17日～2009年11月26日
場所	イギリス
施設	大英博物館・大英図書館

内容報告

・海外調査研究の必要性と目的

本報告者は、現在、保育唱歌と雅楽に関して、かつ島津家の文書を中心として、その音楽的一側面を明らかにすることを目的とし、史料研究をおこなっている。

保育唱歌とは、明治10(1877)年11月から数年にわたり、当時宮内省式部寮雅楽課の伶人24名と東京女子師範学校(現お茶の水女子大学)附属幼稚園保母1名によって作曲された、我が国において初めての教育用唱歌の総称である。その曲数は約100曲に及ぶ。東京女子師範学校附属幼稚園に於いてその創作が始められ、実際に教育の中にも取り入れられた。保育唱歌は、同附属幼稚園のみならず、他地域の幼稚園の一部、東京女子師範学校等の教育機関でも用いられた。たとえば、同附属幼稚園に続いて、2番目に設立された公立幼稚園である鹿児島女子幼稚園でも保育唱歌を用いた教育が行われたとの記録がある。それは、実際に保育唱歌創作に携わり、東京女子師範学校附属幼稚園の保母でもあった豊田英雄が赴任し、教育指導をおこなったことも大きな要因であると思われる。このように保育唱歌の普及には、豊田英雄の例のみならず、東京女子師範学校附属幼稚園保母、および東京女子師範学校の卒業生が深くかかわっているとも考えられる。加えて、保育唱歌作曲を手掛けた雅楽課の伶人らが、唱歌指導として各機関に教授、または演奏に出張していたその影響も大きいであろう。

各地の教育機関で用いられたとされる保育唱歌であるが、その楽譜は未刊行であるため¹、雅楽家や保育関係者によって書き写され、まとめられたものが今に伝えられており、本学附属図書館にもその一つが所蔵されている。本学附属図書館所蔵の写本は、明治16(1883)年に、当時東京女子師範学校の生徒であった「清水たづ」によって写されたものであることが明らかである²。他に、上野学園大学日本音楽史研究所、東京芸術大学附属図書館等の機関にも所

蔵されている。それら唱歌譜は、雅楽の伝統的な記譜法に倣った墨譜で、その曲調も雅楽の伝統に大きく依っている。写本におさめられている曲目、曲数、曲順等は、それぞれに異なり、それら写本を詳細に比較することは、写譜という経緯をたどってまとめられるに至ったその意図や、保育唱歌の伝播を考察するためのひとつの手掛かりになるものとも考えられる。写本の比較研究をおこなうためには、より多くの写本を収集する必要性があった。

さらに、保育唱歌の創作に関する歴史的背景を検討する時、それまで幼児を対象とした専門的教育機関が日本に存在しなかったという史実と、その教育システムを構築するにあたってフレーベル式幼稚園教育書³を参考にし、幼稚園設立へと至ったことは周知の事実であり、考慮すべき点である。とりわけ、それが音楽ないしは唱歌教育を重要視した内容であったことから、保育唱歌創作を手掛けることになった要因のひとつであると考えられる。そういった意味合いでは、保育唱歌が、教科書的な役割を担うものとして、ましてや今後の教育的指針を示すための試みとして、創作されたものではないかという推測は、過言ではないであろう。のちに保育唱歌は、明治15(1882)年から17(1884)年にかけて、文部省取調掛から刊行された『小学唱歌集』の普及にともなって、衰退していった、との通説があるが、これが以上に述べたような推測とも関わりがあるのかどうかは、更に多くの史料と対照した上での分析が必要であると考えられる。

このような状況から、報告者はこれまでに国内における保育唱歌譜、及び関連史料の収集をおこなってきた。しかしながら、国内にて確認することができる、保育唱歌譜をはじめ保育唱歌に直接言及のある当時の史料は多くはなく、現在入手できる史料としては、保育関係者や雅楽関係者による日記及び記録、文部省年報、現在の宮内庁式部職楽部に所蔵される記録、文書といったようなものがある。また、保育唱歌関連の先行研究には、以上のような史料を

用いての歴史的側面からの考察、保育唱歌の音楽的側面からの分析研究、教育的側面からの言及といったようなものも報告されているが、とりわけ保育唱歌譜においては国内の史料のみが確認されているにすぎない。このことから、日本国内のみならず海外に流出した保育唱歌譜、およびそれらに関する資料を確認することは、保育唱歌の基礎的研究をより確実にするものであり、必要不可欠であると考えられる。また、特に保育唱歌譜においては、史料自体に墨以外による加筆が認められる場合があり、それは、複写では明確に確認しにくい部分でもあるため、検討が難しい。よって、実際に直接確認する必要がある。

さらに、保育唱歌研究においては、その作曲者である、作曲当時宮内省式部寮雅楽課の伶人に関する史料、あるいはそれらに関連があるだろうと目される史料の中に、なんらかの手がかりが含まれている可能性があるため、雅楽関係史料の詳細を確認することが重要であった。

以上のことから、本渡航調査では、保育唱歌関連史料の収集と、雅楽関係史料の確認をおこなうことを目的とし調査を行った。

・本海外調査研究の概要と成果

本海外調査研究において調査対象となった場所は、ロンドンの Great Russell Street にある大英博物館 (Japanese Art Department of Asia, The British Museum) と、St Pancras にある大英図書館 (The Asian & African Studies Reading Room, The British Library) である。

① British Museum

今回、調査対象であった平松家旧蔵楽書関係史料については、豊永聡美著「大英博物館所蔵「平松家旧蔵楽書資料」について」⁴によって、事前にその史料の概要をみることができた。豊永氏によると、それらは当時、京都山城国に在った平松時章 (1754 - 1828) が収集した雅楽関連史料を中心としたもので、その数は 93 点におよぶとの報告であった。この膨大な史料は、大きく 4 つに大別されており、(1) 雅楽楽書、(2) 琴楽楽書、(3) 時章の草稿・書簡・日記等、(4) その他、と目録化されていた。目録を参照し、あらかじめ目的とする史料に見当をつけてから British Museum を訪れることを予定していたが、本調査申請後に、British Museum から、アジア部門で開かれる特別展により年内の閲覧は不可能であるとの連絡を受けた。閲覧が難しいという無理を承知の上で、再度、閲覧許可を検討してほしい旨の依頼をしたところ、Rosina Buckland 氏の多大な御好意によって、閲覧の時間と許可をいただくことができた。

目的の史料は、Japanese Art Department of Asia の史料室の奥に数多くある棚の一つにおさめられており、史料それぞれは、いくつかのまとまりによっ

て和紙にくるまれた状態にあった。紙包みの表、および中の史料それぞれには、British Museum によって整理番号がつけられていたが、その詳細について目録は作成されていなかったため、一つ一つを開封し、どういった史料が含まれているのかを確認する作業から始まった。また、British Museum によって付けられた整理番号と、豊永氏の報告にある目録番号とは異なっていたため、あらかじめ見当をつけていた史料を探し出すことは困難であった。限られた時間であった為、すべての史料に詳細に目を通すことは難しく、史料の表題、書簡の宛名、差出人、史料に記載された年代等から判断し、必要と思われる史料を写真におさめる作業を行うことにした。しかしながら史料の開封作業の半分を過ぎた段階になっても、目的の史料のすべてを見つけれなかったため、Buckland 氏がさらに時間を割いてくださった。このことによって、貴重な史料、数百枚に及ぶ写真を撮影することができた。心より感謝したい。

史料には、江戸中期からの雅楽関係の楽譜、書簡、楽器類が含まれており、年代の記述が不明ではあるが明治以降のものと思われる史料も確認することができた。楽譜には、琴譜、風箏譜、箏譜、琵琶譜等、多くの雅楽関係の譜がみられた。その中でも琴に関する史料は、比較的多くの割合を占めている。そのほかには、雅楽についての解説や当時の音楽理論について記されたもの、江戸時代における琴史をうかがい知り得るような史料もみられた。特に、実際の伝授を書きとめた記録、日記、平松時章自身による手稿は、興味深い。残念ながら、これらが寄贈されたその経緯を示すような記述をみることはできなかった。

これら史料は、その数が膨大であるのは当然のことながら、その内容について検討することが、当時の音楽文化を考察する上で重要なことであると思われる。ましてや、雅楽研究を核にする場合には尚更である。今回、楽器については何が所蔵されているかを、大まかに目を通したのみで、撮影、目録化するまでは至らなかった。手稿や書簡についても同様であり、もし今後このような機会に恵まれたのなら、詳細に確認する必要があると考える。

報告者は修士論文以来、江戸から明治へ移行する時期の音楽文化の流れを知るべく史料調査をおこなってきたのであるが、特に、薩摩藩の大名であった島津家と楽人、文化人、公家、武家との交流をおっていく中で、平松家との交流を裏付ける事実関係も見出されていた。そもそも、平松家とは、桓武平氏に源流を持つ公家の一族であるが、島津家との交流は江戸初期に始まり、近世を通じて長く続いていた。また、平松家は代々、島津家をはじめ大名家の上洛に際し、使者をとりなす役割も果たしている。日本側にある平松家文書によれば、雅楽、茶道、香道、和歌、漢詩といったような、当時の公家社会の文化を垣間見ることができるともみられる。平松

家歴代の中でも、時章は議奏職といわれる政治の中核をなす地位についていたため、社会的に高い地位とそれに伴う人脈によって、政治、文化の面で広く活動していた人物と思われる。さらにいうならば、京都という場所柄は、雅楽の教習、情報、および関連資料の収集には都合の良いところでもあった。その時章による資料が今回の閲覧史料群の核をなしていたことは、音楽的側面においてだけでなく、政治、人物関係、文化交流といった社会的側面を補足する意味でも、価値のあるものとして判断できるといえる。

今回の調査で入手できた資料は、今後詳細に検討を重ね、考察を行いたい。

② British Library

British Libraryでの調査においては、まず同ホームページにある蔵書検索システムと出版カタログから閲覧史料の見当をつけた。次に、メールの往復にてreader passを取得し、さらに閲覧を希望する複数資料の事前予約をおこなった。そのため、訪れた際には、reader registrationにおいて住所や所属機関等の情報の登録、および調査目的と身分確認に続いて、カードを発行してもらった後、すぐにReading Roomにて史料をみる事ができた。Reading Roomは部門ごとに関連場所が分かれているが、今回閲覧で訪れた場所は、The Asian & African Studies Reading Roomであり、建物の3階に位置していた。通常、閲覧を希望した場合に、保管場所から閲覧室への資料到着には、最低70分から48時間程度かかるとのことだったから、今回、訪問後すぐに史料を閲覧できたこと、明治初期の教育状況を知り得るような史料を見られたことは幸いであった。British Libraryにおいての調査は、2日間であったため、複写や撮影画像では確認されにくい史料自体への書き入れ、記載情報を確認することを優先した。特に唱歌譜においては、所蔵印や年代、小さな文字による記載事項、薄い墨で書かれた部分を確認することができた。さらに、他史料において、墨以外の色を薄く使って書かれているものもあり、おそらく、これらはカラーコピーや撮影画像では正確に確認しづらい部分であるとも考えられるため、今回の調査は大変意義深いものとなった。

上記のような部分の確認に重点をおいた史料の閲覧後、すぐに複写カウンターで文献のコピーを依頼した。しかしながら、ページ数が多すぎるとのこと、その場でのコピーができなかった。そのため、後日、CD-Rに複写画像を転写後に郵送ということとなった。その手続きは、British Library内にあるPCからLibraryの専用サイトに入り、史料情報、該当ページ、郵送方法などの必要項目を入力することで完了することができた。

残念ながら、本報告段階では、それら史料の複写CD-Rが手元に届いておらず、史料自体についての

詳細を報告することが難しいため、史料と検討結果の報告は、いずれ何らかの形で発表したいと思っている。

・今後の展望

以上、2機関において調査をおこなってきた結果、本海外調査で収集できた史料は、出版されたものではない一次史料であること、現地でしか確認、収集できない史料である、といった貴重性はもちろんのこと、従来用いていた資料のみでは言及しきれない部分を補足するものとして、重要視され得る。特に、保育唱歌譜に関していえば、これまで先行研究では海外におけるその所蔵が言及されていなかった。このことは、保育唱歌譜を検討するにあたってその範囲を広げられたという成果だけでなく、西洋との関係性を考慮する上で見逃せない事実を得られたといった点で意義深い。

明治という、これまでの社会の様相に対して大きな転換期にあつて、一般的に西洋から多くの文化が導入された時期とみられている今日、保育唱歌研究においても、そういった面からの見解をみる事ができる。それは、新しく幼稚園のシステム、教育プログラムを作るにあたってフレーベルの幼稚園教育書を参考にしたことや、保育唱歌の作曲者である伶人たちが、当時既に西洋音楽の伝習や理論を身につけていた事実も要因のひとつである。今回の渡航調査で収集できた史料をもとに、いま一度、保育唱歌譜および関連する一次史料を見直すことは、基礎的な部分を確実にするだけでなく、そこから展開される推測や考察が、これまでの先行研究、さらには日本音楽文化研究を考察する点においても寄与できるものになるのではないかと考える。このことについての検討結果は、現在構想中である論文において反映させていく予定である。同時に、近々、お茶の水女子大学大学院『人間文化論叢』や、『お茶の水音楽論集』での論文発表、あるいは東洋音楽学会での口頭発表を目指している。

また、保育唱歌作品研究という点のみにとどまらないためにも、学位論文の内容の一つには、保育唱歌の成立背景をより明確にするものとして、その作曲家である伶人の活動、交流関係などを含めた当時の音楽的動向に対する史料研究も続けていく予定である。それらを当時の社会的脈絡の中に意味づけるとともに、歴史的側面をふまえた上で、考察をおこなっていく。さらには国内外の写本、書簡、日記、雑誌、新聞等の情報との比較も含め、より具体的に再検証していきたいと考えている。

註

1. 保育唱歌の歌詞集に限っては、市川八十吉（編）『幼稚園唱歌』として、明治19（1886）年に刊行されている。また、現段階において未確認ではあるが、明治16（1883）

- 年に京都において、『唱歌の手飛かへ』が印刷された、ともいわれている。
2. お茶の水女子大学所蔵の『保育唱歌』、および『幼稚園唱歌』は、お茶の水女子大学附属図書館ホームページ、教育研究成果コレクション Tea Pot “日本文化研究コーパス”内、<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/4566>において閲覧が可能である。本報告者によるそれらの解説も掲載されている。
 3. 幼稚園設立当初、翻訳本が出版され、保育唱歌の歌詞にはその翻訳歌詞も採択されている。『幼稚園記』(関信三訳)は、東京女子師範学校から明治9年から10年にかけて、全3巻が発行されており、DOUAI, Adolf 著、“The Kindergarten—a manual for the introduction of Froebel's system of primary education into public schools, and for the use of mothers and private teachers” New York. (報告者は1872年発行、第4版を確認した)およびPEABODY, Elizabeth P; Mrs. MANN, Horace 著、“Moral Culture of Infancy and Kindergarten Guide –with music for the plays” New York. (1876年発行、第6版を確認した)の翻訳本である。『幼稚園 (おさなごのその)』(桑田親五訳)は、明治9年から11年にかけて文部省から発行されており、RONGE, Johan; RONGE, Bertha 著、“A Practical Guide to the English Kindergarten, (children's garden) for the use of mothers, governesses, and infant teachers - being an exposition of Froebel's system of infant training, accompanied by a variety of instructive and amusing games, and industrial and gymnastic exercises, also numerous songs set to music, and arranged for the exercises” London. (1877年発行、第10版を確認した)の翻訳本である。
 4. 1999年、豊永聡美著「大英博物館所蔵「平松家旧蔵楽書資料」について」『東京音楽大学研究紀要』第23号: 1-22頁。

ひがしもと りか／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 比較社会文化学専攻

【指導教員のコメント】

東元りかさんは、修士論文で鹿児島の民俗芸能を取り上げたのを契機として、博士課程では島津家の文書に見られる芸能の記録を中心に、江戸から明治期にかけての伝統芸能と音楽文化のあり方を、調査研究してきた。他方、鹿児島は官立の幼稚園が、日本で2番目に、東京女子師範学校附属幼稚園に続いて、開園した土地であり、文化的教育的な先進性に富む土地柄であるが、日本で最初に作られた音楽教材である保育唱歌もまた、そうした文化的文脈のなかで、鹿児島をはじめとした日本各地で用いられるようになったことがわかる。東元さんは、保育唱歌が雅楽の伶人たちによって作曲され、墨譜による写本によって伝承された点に着目し、雅楽の楽書資料との関わりのなかで、その一つの表われとして保育唱歌を捉え、その伝承の系譜を探っているところである。

今回の調査研究は、こうした文献資料調査の経緯から、海外に存在する資料として、イギリスの大英博物館と大英図書館のそれぞれに収蔵されているというデータがあるものについて、その存在を確認し、その内容についての研究を行なうための複写および撮影を目的としたものであった。両館には大変なご厚誼を得て、様々な配慮をいただいたとのことであり、心より感謝する次第である。そのおかげもあり、これまで明らかになっていない資料を調査することができている。とりわけ、平松家旧蔵楽書関係史料については、雅楽関係の文書が多く含まれていることがわかり、平松家と深い関わりのあった島津家の文化的側面への糸口が得られる可能性がある。また、大英図書館所蔵の保育唱歌についても、写本の一つとして、その伝来の経緯などに関しても、今後の研究の可能性が広がり、保育唱歌が持つコンテクストの幅についての検討が必要になったと言えよう。

江戸から明治期にかけての音楽文化に関する研究は、かなり盛んになっているとはいえ、海外に点在する資料も含めた、さらなる研究の段階に来ていることも確かである。その点で、今回の調査における成果は高く評価できるものである。東元さんの研究の可能性も豊かに広がったことと確信するとともに、今後の学術誌への発表や学会での報告などを重ねて、博士論文へとつながる豊かな成果が得られたと言えよう。

以上から、今回の調査研究は東元さんの研究にとどまらず、音楽学の新しい研究に対して十分な貢献をするものとして、非常に高い成果を収めたと評価することができる。

(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 永原 恵三)